

(提案12)

日本学術会議主催学術フォーラム「こころの健康社会の創造に向けて」の開催について

- 1 開催時期 : 平成25年9月7日(土) 11:00~16:20
- 2 開催場所 : 東京大学医学部教育研究棟14階鉄門記念講堂
- 3 後援 : 日本脳科学関連学会連合

4 開催趣旨

昨年の夏に脳科学関連の19の学会をとりまとめる組織として脳科学関連学会連合が設立され、生物系・医学系の脳科学関連学術団体が力を合わせて様々な学術に関連した課題に取り組んでいくための体制が整備されつつある。一方、米国では、オバマ政権がヒトの脳機能の全容解明に向け、向こう10年間の政府と民間による共同研究プロジェクトを計画すると、1月18日付けのニューヨークタイムス紙に報道されたばかりでもある。一般教書にも、「脳科学研究に、60年代の宇宙研究競争に匹敵する高度な研究開発のため資金投入がなされるべき」との記載がある。また、欧州ではEU Flagship Projectの2つのうちの一つにHuman Brain Projectが、今年採択され、今後15年間に100億ユーロの研究予算が投入される。このような状況を踏まえ、フォーラムでは我が国におけるこれからの脳科学研究のあり方について、さまざまな分野の脳科学研究者とともに、一般市民もまじえて議論を深めたい。

5 次第(予定を含む。)

1) 趣旨説明

金澤一郎(日本学術会議連携会員、国際医療福祉大学院院長)

廣川信隆(日本学術会議連携会員、東京大学大学院特任教授)

2) 講演

藤木完治(文部科学省文部科学審議官)

「脳科学研究の現在と将来；研究政策の立場から」

萩原一郎(日本学術会議第三部会員、明治大学特任教授)

池谷裕二(東京大学大学院准教授)

「脳とこころ」の解明

河西春郎（日本学術会議連携会員、東京大学大学院教授）

小泉英明（日立製作所フェロー）

革新的な脳計測・解析技術

岡野栄之（慶應義塾大学医学部教授）、長洲毅志（エーザイ株式会社理事）

精神・神経疾患の診断・治療・予防

村井俊哉（京都大学大学院教授）

山岸俊男（日本学術連携会員、玉川大学脳科学研究所教授）

社会・教育問題への貢献

3) パネルディスカッション

コーディネーター：大隅典子（日本学術会議第二部会員、東北大学大学院医学系
研究科教授）

立花 隆（ジャーナリスト、東京大学特任教授）

藤木完治（文部科学省文部科学審議官）

加藤忠史（理化学研究所脳科学総合研究センターチームリーダー）

池谷裕二（東京大学大学院准教授）

岡野栄之（慶應義塾大学医学部教授）

(提案 1 3)

日本学術会議主催学術フォーラム「新型出生前診断の広がりや遺伝医療の発展への対応：ヒトの遺伝と遺伝性疾患の正しい理解に向けて」

1 開催時期 平成 25 年 9 月 7 日（土）13 時 30 分～16 時 30 分

2 開催場所 日本学術会議講堂

3 開催趣旨

最近、妊婦の血液で、胎児の染色体異常や遺伝性疾患を一定の確率で判定できる新型の出生前検査技術が開発された。安全に胎児の情報が得られるという利点がある一方、この技術が無制限に広がると、遺伝性疾患などに対する偏見・差別が増すのではないかと、生命の選別を許すことになるのではないかと危惧する声もある。そのため、日本産科婦人科学会では、指針を定め、十分な遺伝カウンセリングの実施が可能であると認定された施設で臨床研究として開始することとした。この指針は、5 団体（日本医師会、日本医学会、日本産科婦人科学会、日本産婦人科医会、日本人類遺伝学会）の共同声明でも支持され、厚生労働省からも全ての関係者はこの指針を遵守すべきである旨の通達が出されている。

こういった社会状況下で、人々の遺伝子や遺伝に関する正しい理解が益々重要になっている。しかし、遺伝子や遺伝について正しく理解しないままに、遺伝性疾患やその患者について誤解や偏見を生んでいる現状があり、そのようなことがないように、初等・中学校課程からの遺伝学教育の必要性が叫ばれるようになって久しいが、未だ実現に至っていない。

社会における遺伝リテラシーの定着と、遺伝医療の正しい発展のためにはどのような方策や配慮が必要であるのか、教育関係者、人類遺伝学や遺伝性疾患・遺伝医療の専門家、行政関係者などにより、課題の所在を明らかにし、学術会議として何が出来るかを議論する。

4 次第（予定を含む。）

13:30 開会の挨拶

山本正幸（日本学術会議第二部長、かずさDNA研究所長）

13:40 講演 I：「新型出生前診断 指針作成までの道のり」

久具宏司（日本学術会議連携会員、東邦大学教授）

14:20 講演 II : 「非侵襲的出生前検査の現状と課題」

関沢明彦 (昭和大学教授)

15:00 (休憩)

15:10 パネルディスカッション (16:30 終了)

(パネリスト)

白石直樹 (都立豊島高校教諭)、櫻井晃洋 (札幌医科大学教授)、

福嶋義光 (日本学術会議連携会員、信州大学教授)

司会 : 室伏きみ子 (日本学術会議第二部会員、お茶の水女子大学寄附研究部門教授)

(提案14)

研究会「未来を拓く学術のあり方：化学とイノベーション」の
開催について

1. 主 催：日本学術会議化学委員会
大学共同利用機関法人自然科学研究機構分子科学研究所
公益社団法人日本化学会
 2. 共 催：なし
 3. 後 援：なし
 4. 日 時：平成25年8月20日（火）13：00 ～18：00
 5. 場 所：自然科学研究機構岡崎コンファレンスセンター
（〒444-0864 岡崎市明大寺町字伝馬8-1）
 6. 分科会の開催：化学企画分科会（同日10：30～12：00）（予定）
 7. 開催趣旨：
「未来を拓く学術のあり方」について、化学とイノベーションという視点から化学の社会に果たすべき役割、大学及び共同研究機関の役割と教育と研究運営、学術誌、研究の展望と夢、科学政策・評価などについて各界の意見考えを基に多角的統括的に討議する。
 8. 次 第：
13：00 挨拶 大峯 巖（日本学術会議連携会員、分子科学研究所所長）
趣旨説明 栗原 和枝*（日本学術会議第三部会員、東北大学原子分子材料科学高等研究機構教授（多元物質科学研究所兼務））
- 「基調講演」
- 13：10-13：50 野依 良治（日本学術会議連携会員、理化学研究所理事長）
「科学技術立国における「国立大学」とは何か」
- 「課題1 化学領域での論文数減少について」
- 13：50-14：10 尾嶋 正治（日本学術会議連携会員、日本化学会副会長、東京大学特任教授）

「日本化学会での議論と提言」

- 14 : 10-14 : 30 中條 善樹 (日本化学会副会長、京都大学教授)
「欧文誌の躍進に向けた取り組み」
- 14 : 30-14 : 50 片岡 幹雄 (奈良先端科学技術大学院大学理事・副学長)
「ユニークな研究／教育運営：奈良先端科学技術大学院大学の取
り組み」
- 14 : 50-15 : 10 朝日 透 (早稲田大学理工学術院教授)
「ユニークな研究／教育運営：新しい大学院教育と TWIns での
医理工融合の試み」

コーヒーブレイク 15 : 10-15 : 30

「課題2 化学とイノベーション」

- 15 : 30-15 : 50 橋本 和仁* (日本学術会議会員、東京大学大学院工学系研究科応用
化学専攻教授、総合科学技術会議議員)
「科学者は社会からの期待に如何に応えるか、応えられるのか？」
- 15 : 50-16 : 10 中川 健朗 (内閣府総括参事官 (科学技術イノベーション 担当))
「国家戦略としての科学技術イノベーション」
- 16 : 10-16 : 30 田中 一宜 (J S T 研究開発戦略センター上席フェロー)
「科学技術戦略とアカデミアの役割～ナノテクの例から～」
- 16 : 30-16 : 50 鎌田 俊彦 (文部科学省科学技術・学術政策局企画官)
「研究開発評価の課題・今後の在り方について」
- 16 : 50- 17 : 50 自由討論 (参加者全員)
「未来を拓く学術のあり方：化学とイノベーション」
話題提供：有本 建男 (政策研究大学院大学教授、JST 研究開発
戦略センター副センター長)

交流会 18 : 10-20 : 00

世話人 : 大峰 巖 (日本学術会議連携会員、分子科学研究所所長)
尾嶋 正治 (日本学術会議連携会員、日本化学会副会長、東京大学
特任教授)
栗原 和枝* (日本学術会議第三部会員、東北大学原子分子材料科学
高等研究機構教授 (多元物質科学研究所兼務))

9. 関係部の承認の有無：第三部承認

(*印の講演者等は、主催委員会委員)

(提案15)

公開シンポジウム「持続共生社会創成をめざす地域総合農学を考える」の開催について

1. 主 催：日本学術会議農学委員会地域総合農学分科会
2. 共 催：農業農村工学会研究委員会
3. 後 援：なし
4. 日 時：平成25年9月4日（水）14:20～16:00
5. 場 所：東京農業大学世田谷キャンパス 331 教室
6. 分科会の開催：開催予定

7. 開催趣旨

日本学術会議は、現在、大型研究計画マスタープランを作成中であり、農学関連でも諸分野横断的な大型研究計画案を検討中である。農業農村工学の立場からは「再生可能なエネルギーと資源を有する循環共生型地域空間に必要な革新的科学技術の創成」という研究計画に、主体的に取り組んでいる。本公開シンポジウム（企画セッション）では、地域における持続共生社会創成をめざす学術的実践例を紹介し、経験や知識の交流を通じて、この研究計画の実現に向けた議論を深める。

8. 次 第：

司会 内田 一徳*（日本学術会議連携会員、神戸大学副学長）

14:20 「日本学術会議大型研究計画；再生可能なエネルギーと資源を有する循環共生型地域空間に必要な革新的科学技術の創成の概要」

宮崎 毅*（日本学術会議連携会員、東京大学名誉教授）

14:30 「農工水産連携による環境保全と付加価値創出の両立を目指して～面的水管理・カスケード型資源循環システムの提案～」

藤原 拓（高知大学農学部教授）

15 : 00 「中山間地の持続的発展を目指して～（株）じょうえつ東京農大の挑戦～」
藤本 彰三（東京農業大学国際食料情報学部、国際バイオビジネス学科教授）

15 : 30 「小水力発電からみた持続共生社会創成の可能性～再生可能エネルギーを管理する農山村～」
小林 久（茨城大学農学部教授）

16 : 00 総合討論
（司会） 内田 一徳*（日本学術会議連携会員、神戸大学副学長）

閉会

9. 関係部の承認の有無：第二部承認

(*印の講演者は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「アンチエイジングのためのスポーツ」の
開催について

1. 主 催：日本学術会議臨床医学委員会運動器分科会
2. 共 催：日本整形外科スポーツ医学会
3. 日 時：平成25年9月13日（金）9:00～10:20
4. 場 所：愛知県産業労働センター
5. 分科会の開催：開催予定なし

6. 開催趣旨

「予防、治療、復帰 三位一体のスポーツ整形外科を目指す」第39回日本整形外科スポーツ医学会学術集会において、整形外科スポーツ医学会の全面的協力の下に、「アンチエイジングのためのスポーツ」というタイトルで開催し、参加者の皆様に中高年に対するスポーツ、運動療法の重要性を訴えたい。

7. 次 第

司会

遠藤 直人（新潟大学整形外科教授）

宮川 俊平（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授）

シンポジスト

福林 徹*（日本学術会議連携会員、早稲田大学スポーツ科学学術院教授）

「20才代以降の日本人体力の変遷と運動プログラムの有用性」

西脇 祐司*（日本学術会議特任連携会員、東邦大学医学部社会医学講座教授）

「高齢者における運動器の健康とそのエビデンス」

山本 智章（新潟リハビリテーション病院医師）

「骨代謝改善に果たすスポーツの役割」

高石 鉄雄（名古屋市立大学システム自然科学研究科生体制御情報系教授）

「自転車運動による健康づくり」

佐藤 英文（厚生連海南病院呼吸器内科医師）

「スクワットマシンによる運動器リハビリテーション」

8. 関係部の承認の有無：第二部承認

(*印の講演者等は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「復興農学—東日本大震災への土壌科学の貢献と課題」の
開催について

1. 主 催：日本学術会議農学委員会土壌科学分科会
2. 共 催：日本農学アカデミー、日本土壌肥料学会
3. 後 援：日本農学会、実践総合農学会
4. 日 時：平成25年9月13日（金）13:00-17:00
5. 場 所：名古屋大学 東山キャンパス
6. 分科会の開催：開催予定

7. 開催趣旨：

日本大震災からの復興のプロセスは多様である。稲作を途切れさせず、その実績から復興の手ごたえを得た地域もあれば、地盤沈下による用排水系の損傷から目処がたたない地域があり、原発事故による放射能汚染地域は、復興はおろか復旧の達成すらほど遠い状況にある。除染モデル実証事業の結果をみても、年間40mSvの区域では40～60%の低減効果にとどまり、一回の除染で空間線量率を一気に安全基準値以下に下げることができない。これに対しては高度な除染技術の開発と実用化が急がれる。また、復興に被災地の自主的な努力が大きな役割を果たし、その意欲的な取り組みに農学会が参画して貴重な成果をあげた例もある。

現時点での津波被災地、放射能汚染地域における土壌科学研究が得た新知見、高度な除染技術などの成果とともに被災地現場での村学協同活動から得られた貴重な事実を検証し、解決の糸口がない森林管理の政策課題とともに今後の復興農学の課題を明確にする。

8. 次 第；

序 復興農学がめざすもの

宮崎 毅*（日本学術会議連携会員、日本学術会議大型研究計画（案）
「東日本大震災からの復興農学拠点」企画責任者）

1. 津波からの復興

(1) 宮城県の状況と土壌科学の課題

南條正巳*（日本学術会議特任連携会員、東北大学大学院農学研究科教授）

(2) 福島県相馬市の津波被災地での営農再開における技術的対策

後藤逸男*（日本学術会議特任連携会員、東京農業大学応用生物科学科教授）

2. 福島第一原子力発電所事故による放射能被害からの復興

(1) 飯舘村 村学協同の除染

主報告 村民の手による調査と除染の努力

菅野宗夫(NPO 法人ふくしま再生の会理事)

支援農学者のコメント

溝口 勝 (東京大学農学国際専攻教授)

休憩 15分

(2) 現地土壌におけるセシウム固定

中尾 淳 (京都府立大学生命環境科学研究科助教)

(3) 除染技術の高度化—セシウムの濃縮分離 (15:50-16:15(25分))

万福裕造 ((独) 国際農林水産業研究センター (飯舘村へ出向中))

(4) 汚染森林の管理の現状と課題 (16:15-16:40(25分))

中村直人 (農林水産省林野庁森林整備部技術開発推進室長)

3. キーノート・コメント

(学術会議と復興農学)

西澤直子* (日本学術会議第二部会員、石川県立大学生物資源研究所教授)

(復興と土壌科学)

松本 聡 (日本土壌協会会長)

(復興農学の国際発信)

中西友子* (日本学術会議連携会員、東京大学大学院農学生命科学研究科教授)

(復興の真実)

森 敏* (日本学術会議連携会員、東京大学名誉教授)

4. 閉会総括 復興農学の実践に向けて

三輪睿太郎* (日本学術会議連携会員、日本学術会議大型研究計画(案)「東

日本大震災からの復興農学拠点」研究代表者)

9. 関係部の承認の有無：第二部承認

(*印の講演者は、主催分科会委員)

(提案18)

公開シンポジウム「低投票率を問題としてどうとらえるか」の開催について

1. 主催：日本学術会議政治学委員会政治過程分科会

2. 日時：平成25年9月15日（日） 13時20分～15時20分

3. 場所：北海学園大学

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

4. 分科会：開催予定

5. 開催趣旨

各種選挙における「低投票率」とりわけ若年層の投票率低下は、日本のみならず先進諸国における共通の現象となっている。これを放置することは、民主主義的な政治の正統性を脅かすことにも繋がりにかねないと思われる。そこで今回は、この問題に関心を有する政治学者を報告者・討論者として迎えて公開シンポジウムを開催し、「低投票率」という状況を政治学的にどう「問題」としてとらえるか、そしてそれに対してどのような対応策があり得るのか、といった問題について広く討論する機会を設定したいと考えた。

6. 次第

司 会：小林 良彰*（日本学術会議第一部会員・副会長、慶應義塾大学法学部教授）

講 師：小野 耕二*（日本学術会議連携会員、名古屋大学法学研究科教授）

西川 伸一*（日本学術会議連携会員、明治大学政治経済学部教授）

谷口 尚子*（日本学術会議連携会員、東京工業大学社会理工学研究科准教授）

コメンテーター：

杉田 敦（日本学術会議第一部会員、法政大学法学部教授）

岡田 陽介（慶應義塾大学講師）

7. 関係部の承認の有無：第一部承認

(*印の講演者等は、主催分科会委員)

(提案19)

公開シンポジウム「医学・生命科学の革新的発展に資する統合バイオイメージングの展望」の開催について

1. 主催：日本学術会議基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同生物物理学分科会
2. 共催：日本生物物理学会、日本蛋白質科学会、日本バイオインフォマティクス学会
3. 後援：調整中
4. 日時：平成25年9月17日（火）13：30～18：00
5. 場所：日本学術会議講堂
6. 分科会の開催：開催予定

7. 開催趣旨：

2013年春、日本学術会議は傘下にある各学術分科会より意見聴取を行い、次期大型研究施設・研究拠点の提案を募った。生物物理学分科会は、重要性、緊急性、発展性、独自性の視点から施設化・拠点化に相応しい課題として「統合バイオイメージング研究所の設立」を提案した。分子・細胞レベルから組織・個体レベルにいたる各種イメージング手法にゲノムやプロテオーム等を対象としたバイオインフォマティクスを組み合わせ、生命機能のメカニズム解明を目指す「統合的イメージング」の最先端技術開発を担う研究所の構想である。この大型研究計画提案の深化と発展を期し、生物物理学分科会は「医学・生命科学の革新的発展に資する統合バイオイメージングの展望」と題するシンポジウムをバイオインフォマティクス分科会との共催により企画し、提案の具体化に向けて議論することとした。

8. 次第：

- 13：30 非侵襲イメージングによる脳情報の解読と制御
川人 光男*（日本学術会議連携会員、国際電気通信基礎技術研究所脳情報通信総合研究所所長）
- 14：00 透明化した脳の神経回路網3Dイメージング
宮脇 敦史（理化学研究所脳科学総合研究センターシニアチームリーダー）
- 14：30 細胞・個体イメージング用光学プローブの開発
永井 健治（大阪大学産業科学研究所教授）

15:00-15:15 (休憩)

15:15 細胞・組織の2D質量分析イメージング

瀬藤 光利 (浜松医科大学教授)

16:00 クライオ電子顕微鏡による超分子・細胞の3Dイメージング

難波 啓一* (日本学術会議連携会員、大阪大学大学院生命機能研究科教授)

16:30 バイオインフォマティクス(1D)から立体構造の動態(4D)へ

中村 春木 (大阪大学 大学蛋白質研究所教授)

17:00 総合討論

(司会) 曾我部正博* (日本学術会議連携会員、名古屋大学 大学院医学研究科特任教授)

(コメンテーター)

永山 國昭* (日本学術会議特任連携会員、自然科学機構生理学研究所特任教授)

美宅 成樹* (日本学術会議連携会員、名古屋大学名誉教授) 他

18:00 閉会

9. 関係部の承認の有無: 第二部承認

(*印の講演者は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「アドバンスト教育と分野別第三者評価事業がもたらす
獣医学教育の進化」の開催について

1. 主 催：日本学術会議食料科学委員会獣医学分科会

2. 日 時：平成25年9月22日（日）9：00～12：00

3. 場 所：岐阜大学農学部キャンパス 第4会場

4. 分科会の開催：なし

5. 開催趣旨：

近年国内外における口蹄疫や鳥インフルエンザなど人獣共通感染症の征圧や食の安全確保の必要性から獣医学への関心が急速に高まっている。常にそれらの問題解決に直接携わる責務を有する牛や豚などの獣医療を担当する産業動物獣医師、また人と動物にまたがる感染症対策や生活環境の保全の推進を担当する公衆衛生獣医師の育成にも同様に強い関心が寄せられている。その中で将来の獣医療を担う獣医学生に対して、いかに高度かつより実践的な専門知識と技術を提供する獣医学教育システムを構築するか、すなわち高度な専門家養成教育システム内における教育内容の質と将来の環境変化に迅速に対応することが求められている。

上述の観点から、本シンポジウムでは今後の獣医学実習教育の質的向上策とその推進を目指して、以下の2つのテーマ、すなわち1) 分野別第三者評価の立ち上げ（薬学を例に考える）、および2) 各大学における獣医学教育アドバンスト教育の設定状況とその効果および今後への対応策等を論議する。

本シンポジウムによる討議結果は、我が国獣医科大学と学外諸団体および自治体の獣医療機関との連携教育の促進、および日本学術会議や日本獣医学会における今後の動物医療や食の安全に関わる学術面からの現状分析および新たな政策提起など、我が国獣医学教育の改善促進および国民への情報提供の機会ともなり、日本学術会議が共催するシンポジウムとして意義あるものと考えられる。

6. 次 第：

総合座長：橋本善春*（日本学術会議特任連携会員、帯広畜産大学畜産学部特任教授）

座長 中山裕之（東京大学農学生命科学研究科教授）

1. 「質の高い薬剤師養成に貢献するための評価を目指して」（60 分）

戸部 徹（昭和薬科大学薬学部教授）

伊藤茂男*（日本学術会議連携会員、北海道大学獣医学研究科特任教授）

2. 「アドバンスト教育がもたらす獣医学教育の深化」

木村和弘（北海道大学獣医学研究科教授）

前田敬一郎（東京大学農学生命科学研究科教授）

海野年弘（岐阜大学応用生物科学部教授）

村瀬敏之（鳥取大農学部教授）

笹井和美（大阪府立大学生命環境科学研究科教授）

佐藤晃一（山口大学農学部教授）

閉会の辞 尾崎 博*（日本学術会議第二部会員、東京大学農学生命科学研究科教授）

7. 関係部の承認の有無：第二部承認

(*印の講演者は、主催分科会委員)

市民公開講座「さーもん・かふえ 2013」の開催について

1. 主 催：日本学術会議食料科学委員会水産学分科会、「さーもん・かふえ」実行委員会
2. 共 催：なし
3. 後 援：東京大学大気海洋研究所、北海道大学、岩手県、岩手大学三陸復興推進本部
4. 日 時：平成 25 年 9 月 23 日（月） 13:30～18:00
9 月 24 日（火） 9:00～12:00
5. 場 所：エスポワールいわて
〒020-0021 岩手県盛岡市中央通り 1-1-38
6. 分科会の開催：なし
7. 開催趣旨：

現在、東北地方太平洋沖地震とそれに伴う大津波により三陸の沿岸生態系が受けた各種の直接的・間接的影響をできるだけ早く具体的に明らかにすることを目標に「東北マリンサイエンス拠点形成事業」が行なわれている。本事業の一環として、東北地方におけるサケ資源の回復と持続可能な利用並びにサケ増殖体制の確立が目的にあげられている。日本学術会議と「さーもん・かふえ」実行委員会はその目的に則し、現地にて科学的知見に基づく科学者－行政－利害関係者による「さーもん・かふえ」を開催し、大震災からの一日でも早い復興の支援に資する。

8. 次 第：

9 月 23 日

13:30 開会挨拶

木暮一啓（東京大学大気海洋研究所副所長・教授、東北マリンサイエンス拠点形成事業(海洋生態系の調査研究)副代表機関代表研究者)

〈トピック・セッション〉

- 13:40 「三陸の海を空から見ると-東北沿岸WebGIS」
齊藤誠一*（日本学術会議連携会員、北海道大学大学院水産科学研究院教授）
- 14:10 「サケの母川回帰の不思議」
竹井祥郎（東京大学大気海洋研究所教授）
- 14:40 「未定」
山尾政博*（日本学術会議特任連携会員、広島大学大学院生物圏科学研究科教授）
- 15:10 「未定」
黒川忠英（東北区水産研究所資源生産部グループ長）
- 15:40 休憩
- 16:00 「未定」
清水幾太郎（中央水産研究所水産経済部水産政策研究員）
- 16:30 「未定」
佐藤俊平（北海道区水産研究所研究員）
- 17:00 「未定」
宮腰靖之（北海道立さけます内水面水産試験場研究主幹）
- 17:30 「サケ幼魚はどこへ？沿岸生活史と親魚鱗の分析結果から」
帰山雅秀*（日本学術会議連携会員、北海道大学国際本部特任教授）
- 9月24日
- 9:00 パネル・ディスカッション「何でもディベード」
（コーディネイター）
帰山雅秀*（日本学術会議連携会員、北海道大学国際本部特任教授）
清水勇一（岩手県水産技術センター主任専門研究員）

11:55 閉会挨拶

山内皓平* (日本学術会議連携会員、愛媛大学南予水産研究センター長、
岩手大学三陸復興推進本部客員教授)

9. 関係部の承認の有無：第二部承認

(*印の講演者は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「多元的共生を志向する農業環境システム設計科学
－「農」のあるべき姿の創造－」の開催について

1. 主 催：日本学術会議農学委員会農業生産環境工学分科会
2. 共 催：調整中
3. 後 援：日本農業気象学会（調整中）、日本生物環境工学会（調整中）
4. 日 時：平成25年9月24日（火）13：30～17：30
5. 場 所：日本学術会議6階会議室
6. 分科会の開催：開催予定

7. 開催趣旨：

偏った人口動態（高齢化、過疎化）と食料需給のグローバル化の圧力によって、国土の大半を占める農山村地域で深刻な高齢化と過疎化が進行し、農山村地域の多面的機能の崩壊による国土・国勢の急激な荒廃が危惧されている。これらの打開には、「経済効率と持続可能性」、「グローバルとローカル」、「都市と農山村」、「工業と農業」、「人間と自然」等の多様な二項群に対する全体最適化による「多元的共生」を基盤とした地域振興が必須である。したがって、多元的共生を可能にする地域農業と地域環境の「あるべき姿」の創造に寄与する農業環境システム設計科学を推進することが、国土・国勢の未来可能性を保証するために不可欠である。本シンポジウムは、農業環境システム設計科学の哲学的基軸、進むべき方向性および具現化すべき成果を模索するために開催する。

8. 次 第：

13：30 開会挨拶

大政 謙次*（日本学術会議第二部会員・農学委員会農業生産環境工学分科会委員長、東京大学大学院農学生命科学研究科教授）

13：35 多元的共生を志向する農業環境システム設計科学の意義

北野 雅治*（日本学術会議連携会員、九州大学大学院農学研究院教授）

13：45 「農」と共生の思想

尾関 周二（東京農工大学大学院名誉教授）

14：30 気象・気候の克服と利用の目指すべき方向性－寒地を例として－
廣田 知良（北海道農業研究センター上席研究員）

15：00－15：30 （ 休憩 ）

15：30 バイオマス利用の目指すべき方向性
凌 祥之（九州大学大学院農学研究院教授）

16：00 農業施設における工学技術の現状と持続性への展望
佐瀬 勘紀（日本大学生物資源科学部教授）

16：30 高次機能性植物の目指すべき方向性
後藤 英司*（日本学術会議連携会員、千葉大学大学院園芸学研究科教授）

17：00 総合討論
（司会）位田 晴久*（日本学術会議連携会員、宮崎大学農学部教授）

17：25 閉会挨拶
野口 伸*（日本学術会議第二部会員・食料科学委員会委員長、北海道大
学大学院農学研究院教授）

9. 関係部の承認の有無：第二部承認

（*印の講演者は、主催分科会委員）

(提案23)

公開シンポジウム「心とからだの理解と治療に向けての新戦略—人体シミュレーションによる医療・創薬の推進—」の開催について

1. 主催：日本学術会議基礎医学委員会機能医科学分科会、総合工学委員会・機械工学委員会合同計算科学シミュレーションと工学設計分科会
2. 後援：日本生理学会、日本薬理学会
3. 日時：平成25年9月28日（土）13：30～16：45
4. 場所：日本学術会議 講堂
5. 分科会の開催：開催予定（11：00～12：45）

6. 開催趣旨：

超高磁気MRI、次世代PET、多光子顕微鏡など、生体機能計測技術の飛躍的な発展により、からだの機能や心の動きをリアルタイムで捉えることが可能となってきた。一方、遺伝子・蛋白情報の充実や利用度に比較し、生体機能情報は再利用可能な形での蓄積、系統的な分類がなされていない。本シンポジウムでは、からだの機能やこころの動きがどこまで読み取れるようになったかを、我が国をリードする研究者に語って頂き、また、これらの生体機能情報を体系化して医療や創薬に役立て、さらにスーパーコンピュータの中に再構築した人体シミュレーション「バーチャルヒューマン」創設に向けての取り組みをご講演頂く。

私達の身の回りは計算科学に基づく「予測情報」にあふれ、その多くは誰もが自由にアクセスし、生活に役立てることができる。一方、治療方針や病気の予後については、未だに医師の経験や勘に頼る医療に任され、データに基づく予測医療から大きく遅れをとっている。生体機能予測の推進で、我が国の医療・創薬の将来がどう変わるか、国民一人一人がパーソナルバーチャルヒューマンを持ち疾病の予防・治療予測に役立てる時代の到来に向け、どう変わらなければならないかを考える。

7. 次第：

13：30 「開会の挨拶」

本間 さと*（日本学術会議第二部会員、北海道大学大学院医学研究科特任教授）

13：35 「脳の暗号を解読する」

神谷 之康 ATR 脳情報研究所・神経情報学研究室・室長
座長：宮下 保司*（日本学術会議第二部会員、東京大学大学院医学系研究科教授）

14：10 「『多臓器円環のダイナミクス』研究の科学史的意義」
入來 篤史（日本学術会議連携会員、理化学研究所脳科学総合研究センター・チームリーダー）
座長：内匠 透*（日本学術会議連携会員、理化学研究所脳科学総合研究センター・チームリーダー）

14：45 「生命の仕組みに基づく薬の効果・毒性の理解から医薬品創製まで」
鈴木 洋史 東京大学病院 薬剤部 教授
座長：松木 則夫*（日本学術会議連携会員、東京大学大学院薬学系研究科教授）

休憩 15:20-15:30

15：30 「個体レベルのシステムバイオロジーの実現に向けて」
上田 泰己（東京大学医学系研究科教授）
座長：飯野 正光*（日本学術会議連携会員、東京大学大学院医学系研究科教授）

16：05 「マルチスケール・マルチフィジックス心臓シミュレータ UT-Heart による基礎医学、臨床医学研究の現状」
久田 敏明（東京大学大学院新領域創成科学研究科教授）
座長：萩原 一郎*（日本学術会議第三部会員、明治大学研究知財戦略機構特任教授）

16:40 「閉会の挨拶」
河西 春郎*（日本学術会議連携会員、東京大学大学院医学系研究科教授）

8. 関係部の承認の有無：第二部承認、第三部承認

(*印の講演者等は、主催分科会委員)

(提案24)

公開シンポジウム「国立自然史博物館へようこそ」の開催について

1. 主 催：日本学術会議基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同自然史標本の文化財化分科会、動物科学分科会、基礎生物学委員会・統合生物学委員会・地球惑星科学委員会合同自然史・古生物学分科会
2. 共 催：なし
3. 後 援：なし
4. 日 時：平成25年9月28日（土）9：00～11：30
5. 場 所：岡山大学津島キャンパス
6. 分科会の開催：開催予定

7. 開催趣旨：

人類のサステナビリティは生物多様性の保全が保証する。生物多様性は自然史標本で証拠立てられる。従って自然史標本は人類の財、すなわち‘自然史財’である。しかし、自然史研究が不十分な日本では、自然史財の意義付けはもとより、国土の生物多様性すら解明できていない。東日本大震災によって東北地方の生物多様性は大きな影響を受けたと考えられるが、震災前の自然史研究のデータが貧弱であり、保管されていた自然史標本の多くが失われたため、科学的な比較検討は困難である。このような日本の現状から脱却するには、自然史標本を収集・保全し、生物多様性の変遷を明らかにし、生物資源を活用するための自然史研究の拠点、すなわち「国立自然史博物館」が必要である。そこで動物学会会員有志が中心となり、学術会議に対し「国立自然史博物館の設立」を提案した。本シンポジウムでは国立自然史博物館が如何に必要であるか、様々な立場から講演していただく。

8. 次 第：

9：00 開会挨拶

浅島 誠*（日本学術会議連携会員、日本学術振興会理事）

- 9 : 1 0 「国立自然史博物館の設立を推進する会立ち上げまでの経緯」
岸本健雄*（日本学術会議第二部会員、お茶の水女子大学サイエンス&
エデュケーションセンター客員教授）
- 9 : 3 0 「自然史科学のイノベーションを目指す国立自然史博物館の設立」
松浦啓一*（日本学術会議会員特任連携会員、国立科学博物館特任研究員）
- 1 0 : 0 0 「ゲノム研究が導く自然史の解明」
齋藤成也*（日本学術会議第二部会員、国立遺伝学研究所集団遺伝研究部
門教授）
- 1 0 . 3 0 「沖縄に国立総合博物館を」
辻 和希*（日本学術会議連携会員、琉球大学資料館教授）
- 1 1 : 0 0 「国立東北自然史博物館は震災復興の象徴」
西 弘嗣*（日本学術会議連携会員、東北大学）
- 1 1 : 3 0 閉会

9. 関係部の承認の有無：第二部、第三部承認

(*印の講演者は、主催分科会委員)

(提案25)

公開シンポジウム「ここまで分かった水生動物行動の謎」の開催について

1. 主催：日本学術会議心理学・教育学委員会・基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同 行動生物学分科会、基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同 海洋生物学分科会、食料科学委員会水産学分科会

2. 後援：日本バイオリギング研究会、JST 復興促進センター

3. 日時：平成25年9月29日（日）13：30～18：20

4. 場所：日本学術会議講堂

5. 分科会の開催：開催予定

6. 開催趣旨：

四面を海に囲まれた我国では、謎に満ちた水生動物の行動に関する様々な研究が盛んに行われており、最新の電子機器を用いた周到な研究により、世界初の知見が数多く報告されている。本シンポジウムでは、頭足類・鳥類・哺乳類の索餌行動、および魚類の回遊行動に関する最新の研究成果を発表するとともに、水生動物行動研究の将来展望について総合討論する。

7. 次第：

13：30 開会の挨拶

渡邊 茂*（日本学術会議連携会員、行動生物学分科会委員長、慶應義塾大学文学部教授）

13：40 ダイオウイカ：トワイライトゾーンの摂餌戦略

窪寺 恒己（国立科学博物館標本資料センターコレクションディレクター）

14：10 海鳥類の採餌戦略

依田 憲（名古屋大学大学院環境学研究科准教授）

14：40 イルカの音響探査行動

赤松 友成（（独）水産総合研究センター水産工学研究所エネルギー・生物機能利用技術グループ長）

15：10－15：30 休憩

15：30 クロマグロの回遊・行動生態はどこまで分かったか

北川 貴士（東京大学大気海洋研究所准教授）

16：00 サケの嗅覚による母川記銘・回帰行動

上田 宏*（日本学術会議連携会員、北海道大学北方生物圏フイールド科学センター教授）

16：30 ウナギの回遊行動の起源と進化

塚本 勝巳（日本大学生物資源学部教授）

17：00－17：10 休憩

17：10 総合討論

（司会） 岡ノ谷一夫*（日本学術会議連携会員、東京大学大学院総合文化研究科教授）

（コメンテーター）

桑村 哲生*（日本学術会議連携会員、中京大学国際教養学部教授）

辻 和希*（日本学術会議連携会員、琉球大学農学部教授）

友永 雅己*（日本学術会議連携会員、京都大学霊長類研究所准教授）

仁平 義明*（日本学術会議連携会員、白鷗大学教育学部教授）

18：10 閉会の挨拶

長谷川寿一*（日本学術会議第一部会員、東京大学理事・副学長）

18：20 閉会

8. 関係部の承認の有無：第一部・第二部承認

(*印の講演者は、主催分科会委員)

(提案26)

公開シンポジウム「気候変動に対応した21世紀育種戦略」の開催について

1. 主 催：日本学術会議農学委員会育種学分科会
2. 共 催：日本育種学会
3. 後 援：なし
4. 日 時：平成25年10月12日（土）13：00～17：30
5. 場 所：鹿児島大学郡元キャンパス
6. 分科会の開催：なし

7. 開催趣旨：

近年の夏季の高温は作物の生産性や品質に大きな影響を及ぼしている。IPCC第4次報告書によると、21世紀末には地球の平均気温は4.2℃上昇すると予測され、地球規模での温暖化は一層深刻化すると警告されている。一方、局地的には未曾有の冷害や豪雨が発生するなど、人類の歴史上、最大の危機的シナリオが進行している。このような現在と将来の気候変動に対応して、作物育種の分野では高温耐性、乾燥耐性、塩類耐性など不良環境耐性品種の開発への取組みが活発化している。そこで、本シンポジウムでは、気候変動の予測と農林業への影響、気候変動に対応した育種研究の現状と将来目標および国際連携による育種研究の動向について議論し、21世紀における作物育種の課題を展望する。本シンポジウムは、7月12日に行われた日本学術会議公開シンポジウム「気候変動がもたらす農林業への影響とその対策を考える」での議論を受けて、気候変動に対応した作物育種に話題を絞って議論するものです。

8. 次 第：

13：00 開会挨拶

奥野 員敏*（日本学術会議連携会員、筑波大学北アフリカ研究センター研究員）

第1部 気候変動がもたらす農業への影響と国際共同研究による育種

司会：奥野 員敏*（日本学術会議連携会員、筑波大学北アフリカ研究センター研究員）

13：05 気候変動予測に基づく農業への影響評価と適応策

中川 博親（農業・食品産業技術総合研究機構中央農業総合研究センター上席研究員）

長谷川利拡（農業環境技術研究所上席研究員）

13 : 35 国際研究機関と連携した乾燥耐性分子育種技術の開発
藤田 泰成 (国際農林水産業研究センター上席研究員、筑波大学大学院生命
環境科学研究科連携大学院准教授)

14 : 05 イネの耐乾性向上をめざした国際連携によるゲノム育種
宇賀 優作 (農業生物資源研究所主任研究員)

14 : 35 - 14 : 45 (休憩)

第2部 気候変動に対応した作物育種の現状と未来

司会 : 根本 博 (農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所稲研究領域長)

14 : 45 水稻の高温耐性に関する遺伝的要因と育種戦略
小林 麻子 (福井県農業試験場主任研究員)

15 : 15 気候変動に対応した果樹育種
山本 俊哉 (農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所上席研究員)

15 : 45 水稻の耐冷性育種研究の新展開
佐藤 裕 (農業・食品産業技術総合研究機構北海道農業研究センター上席研
究員)

16 : 15 トウモロコシの湛水耐性育種
間野 吉郎 (農業・食品産業技術総合研究機構畜産草地研究所主任研究員)

16 : 45 総合討論
「地球規模での気候変動に対応した、メイドインジャパン育種研究の
国際貢献」

(司会) 奥野 員敏* (日本学術会議連携会員、筑波大学北アフリカ研究センター研
究員)

根本 博 (農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所稲研究領域長)
(コメンテーター)

武田 和義* (日本学術会議連携会員、岡山大学名誉教授)

17 : 30 閉会

9. 関係部の承認の有無 : 第二部承認

(*印の講演者は、主催分科会委員)

(提案27)

公開シンポジウム「現代日本におけるワークライフバランスを考えるー関西からの発信ー」の開催について

- 1 主 催 日本学術会議経済学委員会ワークライフバランス研究分科会
大阪経大学会
- 2 共 催 社会政策学会
- 3 日 時 平成25年10月12日(土) 18時00分～20時00分
- 4 場 所 大阪経済大学 B号館 32教室 (大阪市東淀川区大隅2-2-8)
- 5 分科会開催予定 予定なし

6 開催趣旨

ワークライフバランスに社会的な関心が集まってから、行政、企業をはじめ、さまざまなレベルで活発な動きがみられている。とりわけ、企業における取り組みは現在の到達段階を示すものとして注視する必要がある。今回のシンポは、正規のみならず非正規で働く人々にまで視野を広げ、ワークライフバランスの真の実態にまで迫ろうとする狙いをも有している。ワークライフバランスを本当に意義あるものとするためには、その浸透度の広さ、深さを追求しなければならない。中小企業を多く抱える関西・大阪で本テーマを議論することは、ワークライフバランスの今後を考えるうえで有益である。

7 次第

司 会 玉井金五* (日本学術会議連携会員、大阪市立大学大学院経済学研究
科教授)

報告1 「非正規のワークライフバランス」

西村 智 (関西学院大学経済学部教授)

報告2 「ワークライフバランスと企業の施策」

服部良子 (大阪市立大学大学院生活科学研究科准教授)

コメンテーター

川口 章 (同志社大学政策学部教授)

久本憲夫*（日本学術会議連携会員、京都大学公共政策大学院教授）

8. 関係部の承認の有無：第一部承認

(*印の講演者等は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「情報学による未来社会のデザインシンポジウム」の開催について

1. 主 催： 日本学術会議情報学委員会環境知能分科会、独立行政法人科学技術振興機構（JST）
2. 後 援： 一般社団法人 情報処理学会(調整中)
一般社団法人 電子情報通信学会(調整中)
一般社団法人 人工知能学会(調整中)
3. 日 時： 平成25年10月15日（火） 10:00～18:30
4. 場 所： 学術総合センター 一橋記念講堂
5. 分科会の開催： 同日、昼食時に環境知能分科会を開催
6. 開催趣旨：
情報学には、社会システムのデザインを実現していくツールや規範としての役割が大いに期待されている。
今後に向けた新たな研究課題や開発の流れ・うねりを創出するために、JST CREST, さきがけの情報学関係のプログラムと連携し、3年間に渡り様々な分野の参加者を募り討論を行う。
今回はその第2回目にあたり「情報学が拓くヘルス&ウェルネス」をテーマとする。
7. 次 第：
開会挨拶 石田 亨*（日本学術会議第三部会員、京都大学教授）
さきがけ研究総括
基調講演 伊福部達（東京大学 名誉教授）
招待講演 Dave Blakely（IDEO：米国デザインコンサルタント会社）
研究発表 石黒 浩（ATR 室長） CREST
「デンマーク・スウェーデンを含む遠隔対話長期実証実験」

大武美保子（千葉大学准教授） さきがけ
「高齢者の大規模会話データからの認知活動支援」
梶本裕之（電気通信大学 准教授） さきがけ
「ハンガー反射現象の痙性斜頸患者への医療応用」
高玉圭樹（電気通信大学 教授） さきがけ
「介護福祉施設における快眠支援とケアシステム」

パネルセッション

「ヘルス&ウェルネスを拓くためのブレークスルーは なに？」

モデレータ：石田 亨（日本学術会議第三部会員、京都大学教授）

- ・パネリスト①五感技術を越えて
廣瀬通孝*（日本学術会議連携会員、東京大学教授）
- ・パネリスト②「知の創生」を越えて
中島秀之*（日本学術会議連携会員、はこだて未来大学学長）
- ・パネリスト③ネットワークロボットを越えて
徳田英幸（日本学術会議連携会員、慶応大学教授）
- ・パネリスト④医療福祉の未来 秋山昌範（東京大学教授）

総評・閉会挨拶

東倉洋一（国立情報学研究所名誉教授） CREST 研究総括

8. 関係部の承認の有無：第三部承認

(*印の講演者等は、主催分科会委員)

(提案29)

公開シンポジウム「地域研究の「粹」を味わう——現地から中央アジア、オセアニア、EU、東南アジアを読む」の開催について

1. 主 催：日本学術会議地域研究委員会地域基盤整備分科会
2. 日 時：平成25年11月16日（土）13：00～17：00
3. 場 所：青山学院大学講堂
4. 分科会等：開催予定
5. 開催趣旨：

地域研究とは何か。海外のさまざまな現象を研究する「地域研究」が、日本で学問として市民権を得るようになって、半世紀近くが経つ。欧米の「エリア・スタディーズ」が冷戦期の戦略的な志向をもち、その学術性に疑問が投げかけられがちなのに対して、日本の地域研究は、より幅広く、特定の利害関係から自由な、豊かな学問として発展してきた。海外の現象から得られる「発見」。世界のなかに自らをおくことで可能となる「相対化」。海外のさまざまな事象を比較して、一般則を見出す「比較」。そしてそれぞれの地域の文化、社会の独自性を知ることが前提とする「多文化共生」。グローバル化された現代社会に、地域研究は不可欠である。

本シンポジウムでは、中央アジア、オセアニア、EU、東南アジアを舞台に、長年「地域研究」に携わってきた専門家が、それぞれの地域研究の「粹」を語る。同時に、同じ地域研究でも、それぞれが専門とする学問分野の違いによって多様なアプローチがあることを、報告から感じて欲しい。

6. 次 第

13:00 開会の辞・司会

武内進一*（日本学術会議連携会員、日本貿易振興機構アジア経済研究所地域研究センターアフリカ研究グループ長）

13:05 趣旨説明

酒井啓子*（日本学術会議第一部会員、千葉大学法経学部教授）

13:20 第1報告

小松久男*（日本学術会議第一部会員、東京外国語大学特任教授）
「中央アジア地域研究の試み—ソ連時代の記憶を中心に」

13:55 第2報告

関根政美*（日本学術会議連携会員、慶應義塾大学法学部教授）
「オセアニア（オーストラリア）の国際移民と多文化共生」

14:30 休憩

- 14:40 第3報告
羽場久美子* (日本学術会議第一部会員、青山学院大学大学院国際政治経済学
学研究科教授)
「グローバル時代における EU の境界線とナショナリズム」
- 15:15 第4報告 末廣 昭 (日本学術会議連携会員、東京大学社会科学研究所教授)
「グローバル化とネット情報は地域研究を無用にしたか? タイ研究者の視点
から」
- 15:50 休憩
- 16:00 総合討論
小松久男* (日本学術会議第一部会員、東京外国語大学特任教授) 中央アジア
関根政美* (日本学術会議第一部会員、慶應義塾大学法学部教授) オセアニア
羽場久美子* (日本学術会議第一部会員、青山学院大学大学院国際政治経済学
研究科教授) EU
末廣 昭 (日本学術会議連携会員、東京大学社会科学研究所教授) 東南アジア
酒井啓子* (日本学術会議第一部会員、千葉大学法経学部教授) 中東
武内進一* (日本学術会議連携会員、日本貿易振興機構アジア経済研究所地域研
究センターアフリカ研究グループ長)
- 16:55 閉会の辞
田中耕司* (日本学術会議第一部会員、京都大学特任教授、学術研究支援室長)

7. 関係部の承認の有無： 第一部承認

(*印の講演者等は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「持続可能で安心安全な社会の実現に向けた電気電子工学の人材とグローバル化」の開催について

1. 主催：日本学術会議電気電子工学委員会デバイス・電子機器工学分科会

2. 共催：なし

3. 後援：なし

4. 日時：平成25年11月20日（水） 13:30～17:00

5. 場所：日本学術会議講堂

6. 分科会の開催：電気電子工学委員会デバイス・電子機器工学分科会
(12:00-13:00 開催)

7. 開催趣旨

持続可能で安心安全な社会の実現に向けた電気電子工学のグローバル人材育成に関して、広い視野と時間軸からアカデミアと産業界が一体となって忌憚なく議論する場として、シンポジウムを開催する。

8. 次第：

13:30～13:40 シンポジウム開催に当たって

小長井誠*（日本学術会議第三部会員、東京工業大学大学

院理工学研究科教授）

13:40～15:40 (1) 大学 電気電子工学の重要性と次世代グローバル

人材育成「東大の教養課程の学生を電気に振り向かせる」

保立和夫*（日本学術会議第三部会員、東京大学大学院工学系研究
科教授）

(2) 「電気系を希望する受験生を増やすには」

為近和彦(代々木ゼミナール物理科講師)

(3)産業界 グローバル社会、ビジネスに向けた企業が求める
人材像

「機械系企業が期待する電気系のグローバル人材とは」

前川 篤(三菱重工業株式会社副社長)

「電気系企業からみたグローバル人材」

西野壽一(株式会社日立製作所 執行役専務)

15:40～16:00 (休 憩)

16:00～17:00 パネルディスカッション

「大学が担うグローバル人材育成と企業の求める人材像」

・オーガナイザー

福井孝志*(日本学術会議連携会員、北海道大学情報科学
研究科教授)

・パネリスト

保立和夫*(日本学術会議第三部会員、東京大学大学院工学
系研究科教授)

波多野睦子*(日本学術会議連携会員、東京工業大学理工学
研究科教授)

前川 篤(三菱重工業株式会社 副社長)

西野壽一(株式会社日立製作所 執行役専務)

9. 関係部の承認の有無：第三部承認

(*印の講演者は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「新たな統治機構改革—道州制をめぐる—」の開催について

1. 主催

日本学術会議政治学委員会、政治学委員会行政学・地方自治分科会、
中央大学経済研究所

2. 日時

平成25年11月23日(土) 13:30～16:45

3. 場所

日本学術会議講堂

4. 委員会等開催予定 委員会、分科会開催予定

5. 開催趣旨

日本の政治において、経済再生論議の一方で、明治半ばに形成された中央集権体制の見直し、とりわけ国、都道府県、市町村、そして出先機関などの二重、三重行政が問題視され、三層制の統治機構全体を「道州制」移行を視野に大改革に挑む政治の流れが出てきている。

さきの通常国会後半に野党2党から「道州制基本法」が出され、継続審議扱いとなり、秋の臨時国会には与党2党からも同種の法案が出される見通しにある。その基本法に基づき、政府に道州制国民会議が設置されると、来年以降、道州制をめぐる国民的論議が本格化するものと思われる。

そこで、学術的見地、とりわけ政治学、行政学、経済学などからこの「道州制」をどうみるか、都道府県はもとより、大都市、小規模町村、さらに省庁体制のあり方まで含め議論してみたい。わが国では地方分権改革が行われているが現在停滞感も否めない。そこで「新たな統治機構改革」と銘打って、現場を抱える首長、ジャーナリストにも加わっていただき、様々な視点から議論を深めてみたい。それが開催の趣旨である。

6. 次第

司会

川井綾子(フリーキャスター)

《第I部・講演》

13:30～13:35 開会挨拶

猪口邦子* (日本学術会議一部会員・政治学委員長、参議院議員、日本大学客員教授(国際政治学))

13:35～14:05 (30分)

基調講演Ⅰ「道州制と大都市のあり方」

佐々木信夫* (日本学術会議一部会員、中央大学大学院経済学研究科教授)

14:05～14:35 (30分)

基調講演Ⅱ「道州制と日本経済の今後」

林 宜嗣 (関西学院大学教授)

14:35～15:15 (40分)

特別講演「東日本大震災と道州制」

村井 嘉浩 (道州制首長連合代表、宮城県知事)

(休憩)

《第Ⅱ部・パネルディスカッション》

15:25～16:45 (80分)「新たな統治機構改革—道州制のゆくえ」

パネリスト 青山 彰久 (読売新聞編集委員)

村井 嘉浩 (道州制首長連合代表、宮城県知事)

林 宜嗣 (関西学院大学経済学部教授)

佐々木信夫* (日本学術会議一部会員、中央大学大学院経済学研究科教授)

コーディネータ

大杉 覚* (日本学術会議連携会員、首都大学東京大学院社会科学研究所教授)

7. 関係部の承認の有無：第一部承認

(*印の講演者等は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「ICT を生かした社会デザインと人材育成(実践編)」の開催について

1. 主 催：日本学術会議情報学委員会情報ネットワーク社会基盤分科会
2. 共 催：大阪大学（予定）、東京大学（予定）
3. 後 援：電子情報通信学会（予定）、情報処理学会（予定）
4. 開催日時：平成25年11月27日（水）13：30～17：40
5. 場 所：日本学術会議講堂
6. 分科会の開催：開催予定（情報ネットワーク社会基盤分科会）

7. 開催趣旨：

ブロードバンドやスマートフォンなど、世界的にも類のない ICT インフラが日本には存在するが、その有効な活用や新しい成長産業の創出は未だ十分とはいえない。特に、ICT による新たなイノベーション創出のためには、幅広い分野の知恵を集めた新しい法や社会規範などの社会デザインができる人材が求められている。現在、大学を中心として、ICT 分野の新たな人材育成の試みが行われているが、社会のこのような要請に答えているのかを検証する必要がある。本フォーラムでは、我が国の ICT 人材育成に携わる取り組みの主催者と、その人材を受け入れる企業、対象となる学生、政策立案者をまじえ、ICT に携わる新たな人材像とその育成について議論を行う。

8. 次 第：

13:30 開催挨拶

尾家 祐二*（日本学術会議第三部会員、九州工業大学理事・副学長）

講演（案）

- 13:40 “東京大学リーディング大学院における現状の取り組み（仮題）”
國吉 康夫（日本学術会議連携会員、東京大学教授）
- 14:00 “京都大学リーディング大学院における現状の取り組み（仮題）”
石田 亨（日本学術会議第三部会員、京都大学大学院教授）
- 14:20 “大阪大学リーディング大学院における現状の取り組み（仮題）”
西尾章治郎（日本学術会議第三部会員、大阪大学大学院教授）
- 14:40 “enPiT における取り組み（仮題）”
 井上 克郎（大阪大学教授）
- 15:00 “EMP 東大における取り組み（仮題）”（案）
 （東京大学学生）（案）
- 15:20 ～ 休憩 10分 ～
- パネル討論（案）
- 15:30 「ICTによる社会デザインのための人材像」
 コーディネータ 下條 真司（日本学術会議連携会員、大阪大学教授）
- パネリスト
- 産業界の方（依頼中）（NTT）（案）
- 産業界の方（依頼中）（NTT以外の企業）（案）
- 学生代表（東京大学、大阪大学、京都大学など）（案）
- 國吉 康夫（日本学術会議連携会員、東京大学教授）
- 西尾 章治郎（日本学術会議第三部会員、大阪大学大学院教授）
- 石田 亨（日本学術会議第三部会員、京都大学大学院教授）
- 井上 克郎（大阪大学教授）
- 17:30 閉会挨拶
浅見 徹*（日本学術会議連携会員、東京大学教授）（案）

9. 関係部の承認の有無：第三部承認

(*印の講演者等は、主催分科会委員)